

私達が生きて行くには愛別離苦・老少不定・諸行無常と無情に感じるべき事に遭遇し、無常観に苛まれる事が多いわけです。この様な生活環境の中で死守しなければならぬ物があるだろうか、あるとするならばそれは何であろうか。当然無形と有形があるでしょう。有形ならば、法律・金・友情・家族・命等なのか、それとも他にあるのだろうか。自然の摂理なのか、全て欲望に繋がってしまうのだろうか。是と非の判断を下す時の肉体的・精神的苦痛に佛様は何と答えて下さるのでしょうか。自業自得で終わるとしたらとても悲しい事だと思えます。勝手ですが誰しも佛様の愛情を身に受けたいのです。我執に囚われ苦しむ人間を衆生済度の佛菩薩様に助けて頂きたいのです。手お合わせ祈りを捧げる者達だけでも御救い下さい。皆願いは届くものと信じています。

振り返れば今年も色々な問題が発生致しました。最近では大島の台風惨事が消えうせぬ中、大きな災害に見舞われました。十一月七日の台風三十号がフィリピンを襲い、レイテ島を含め六千人強の死者がでています。大切な家族が一瞬のうちに亡くなってしまいう、同じ状況下の中で生死を分けるものは何なのか、私は何時も大きな被害が起きるたびに思い悩むのです。運よく命が助かった人は神仏の御蔭と思えども、運悪く亡くなれば神も仏も無いと思う事でしょう。その人が信仰の篤い人かとおかには分かりませんが。家屋の倒壊、インフラの壊滅。一時的に各国の支援があるものだからが大変です。復興には年月を要します。東北の復興を見れば分かります。死守・必死とは文字通り死ぬ気で頑張り守り抜く事でしょう。しかし必死で頑張ったのに死守できなかった。と成れば反動の虚脱感は如何程に成るのでしょうか、当事者でなければ分からない事です。夏に良く起きる水難事故、溺れる人を助け我が身を亡くす。良く聞くとこころです。自分を死守できなければ後味の悪い結果になります。それは悲しむ人がでるからです。人を生かし我も生かす事が共生きです。死守とは物の生命を守り抜く事でしょう。気力・体力を培い、智慧を研ぎ社会に貢献できる体制を整えましょう。どのような環境下にあっても御蔭を頂ける我が身であってほしいと思っています。

橋田壽賀子女史は著『おしんの心』の中でひとりひとりが身の丈に合った物差しを持って、今の時代と向き合うことです。政治が悪い、社会が悪いといくら恨み節を並べてみても、誰も手を差し伸べてはくれないのですから」と。私も全くその通りであると思っています。この本は私が最近読んだ中で一番簡単に処世術を教えてくださいました。生活するには各家庭で色々決め事があると思いますが、平和を望まない家庭生活はありえません。この本には成程と思う点が多々あります。「読されるのも良いかと思えます。私は十一月二十一日に知恩院の御廟に詣で読経念佛中に 今日まで (の命) と思い取りて暮らすべし」と脳裏にうかんだのです。法然上人の御言葉であったと信じています。明日がくれば又一日いただける身に感謝できます。報恩感謝が生活のスタイルとして定着できれば目出度い事です。私は御仏の御加護を求めらるまでもなく、自然に守って頂けると信じて疑いません。

「二年の計は元旦にあり」と申します。心の鐘を打ち鳴らし佛日加護の寺、善入院に詣で初祈願をされたら如何でしょうか。

二十五年十二月一日

善壽界善入院油掛地藏尊